

『オウムからの帰還』 高橋英利 (草思社)

他者欠く奇怪な生活

まっすぐさの果てに

ぼくは、どうして生まれてきたのだろう。ぼくがこの世で生きていく意味って、いったい何なのだろう。

若いときに、「こつ」という問いに直面しなかったひとは少ないんじゃないか。でも、たいがいのひとは、そういう問いを忘れることで、大人になってゆく。そんなこと、いつまでもぐずぐず悩んでいたって、答えが出るわけがない。それよりも、この社会のなかで、たのしく、かしく生活していくほうが大事なのだ。

この本の著者、高橋さんは、そういう態度をとれなかった。「自分の存在の意味を問うことを忘れたまま生きつづけている」のが、耐えられなかった。ぼくが「ここにいて」「ここに、どんな意味があるのか。それを知りたかった」。

オウム真理教は、そんな高橋さんの魂の問いかけにたいして、真正面から答えてくれた。この汚れた世界のなかで、自動機械のように無目的に生きるの間違っている。自分のからだから、汚れたペールを一枚一枚はぎとってゆくことで、ひとは「ほんとうの自分」に出会う。そうやって、自分自身を覚醒(かくせい)させようとすると、ひとびとが集まれば、この世界

をより良いものにできるのだ。

「生の意味」をまっすぐに求めようとした高橋さんは、すべてを捨てて、オウム真理教の出家信者となる。

高橋さんは、「ついに自分の欠落部分を埋めてくれるものに出会った」と思っただけのことだ。しかしそれは、自分たちだけの世界に閉じこもり、「他者」との関係をもつことを拒否するような、そういう奇怪な生活のはじまりだったのだ。

彼は、麻原教祖や、村井幹部たちの側近として科学技術者ではたらくが、やがて疑いを抑えきれなくなり、サティアンから脱出してテレビ朝日に駆け込む。そして、脱会信者としてテレビ出演中に、村井氏の刺殺の速報が流れるのである。

四月二十一日付の「ゴーマニズム宣言」の書評でも書いたけど、モラルの崩れ去ったこの日本の社会で、それでも真の意味で「まっすぐ」に生きようとすることは、いかにして可能なのか。それをふかく考えさせられる、感動的な本である。

『朝日新聞』一九九六年五月五日

おまけ

高橋さんとは、オウム事件後に六本木のテレビ朝日でお会いしたことがある。たしか、私がオウム特番のためのビデオ収録をしたときに、誰かの仲介で会えたのだった。高橋さんは、まだ都心でホテル住まいを続けていた。軽食をとりながら、いろんな話をしたのだが、とても誠実な人だなあという印象をもった。自力で脱会してきたわけだから、もうオウムは相対化できているのだが、それでも、麻原や幹部信者たちの話をするときには、とてもつらそうだった。ときどき、眉間に皺を寄せて、何かの想念を振り

『フェミニズム入門』 大越愛子（ちくま新書）

男もしばる抑圧制度 解放へのメッセージ

男のひとって、フェミニズムが嫌いだよ。おんなは抑圧されているとか、女性の権利とか聞くだけで、不快感でいっぱいになる男は多い。

その理由は、なんとなくわかる気がする。就職差別とか、セクハラとか、そういう突き上げをうけた時、たいがいの男は、「こりゃー、やべーなあ」と、心の底では思うんじゃないか。なぜかといえば、職場で女性を性的好奇心のまなざしで、舐（な）めるように見ていることを、男たちは、はっきりと知っているから。

でも、どうして、男がその訴えに耳をかさそうとしないかというところ、もしその訴えを聞き入れたら、自分たちが味わってきた「既得権」を手放さな

払いながら語っていた。麻原のことを思い出すと、身体が震えたりすることもあるそう。入信して、脱会するというのが、どのくらい精神的にすごいことかというのが、伝わってきた。自然科学に進んでから宗教に惹かれていったというのも、私と似ているなあと思った。その後、高橋さん、上田紀行さんと三人で、一緒にご飯を食べたことがある。楽しい思い出だ。

くちはならなくなるからだ。

大越愛子さんの『フェミニズム入門』は、そういう往生際の悪い男たちに向けて書かれた、愛のメッセージである（と私には読めた）。大越さんはい。フェミニズムとは、たんに男を糾弾する思想なのではない。第三期をむかえたフェミニズムは、この社会のなかでがんじがらめになっている男の精神や身体やセクシュアリティを、解放するようなものなのだ。

男が作り上げてきた抑圧システムは、いままでおんなたちを、あの手この手ではりつけてきた。そして、それは内面の洗脳の次元にまで及んだから、当のおんなたち自身も、自分たちがしばられていることに気づかない、ということさえ起きている。

ところが、そういう洗脳システムを作り上げた男たちもまた、自分が作った装置によって逆に洗脳を受けて、がんじがらめになり、奇怪な性意識

のとりこになり、どうしていいかわからずに右往左往している。

おんなも男も同時にはまっている、このような抑圧システムを、なんとか両側から変えていこうというメッセージが、『フェミニズム入門』には感じられる。

でも、そのためには、まず男たちが、女性からの声を耳を澄まして聞き、彼女たちの思考の蓄積を正面から受け止めないといけない。

この本を読んで、何が書いてあるのかよく分からないというきみ。恋人や、配偶者に聞いてもらいなさい。目から鱗(うろこ)が落ちると思うよ。

『朝日新聞』一九九六年五月一九日

『AV女優』 永沢光雄 (ビレッジセンター出版局)

密着通し実像に迫る

背後に「告白ゲーム」

ぼくらの世代以下の男たちは、AV(アダルトビデオ)によってセックスのイメージを焼き付けられた。そして、若い女性たちも、友人や、恋人や、不倫の相手なんかからビデオをもらって、好奇心半分で、けっこう見ているらしい。

本書「AV女優」は、ライターの永沢光雄さんが、AVに出た女の子たち四十二人に、密着インタビューしたものだ。

おまけ

大越さんとは、京都に行ったばかりの頃に、京都の法蔵館書店の忘年会のようなところでお目にかかったのが最初かもしれない。仏教における性別についての共著を出したばかりだったような気がする。その後、いろんな場所でご一緒するが、なんというか、その豪快なラディカル・フェミニストぶりには、惚れ惚れする。学会のフロアから、大声で「ナンセンス!」と野次れる女性学者が、いまだき、ほかにいるだろうか。いろんなことを教えてもらった。

川村弥代生は、アメリカへの留学資金をかせぐためにAVに出演したと言う。「君はスケベでしょ」「ハイ」「エッチでしょ」「ハイ」と答えている川村は、「今の仕事、好きじゃないんでしょ?」と聞かれて、思わず「ウン」と答えてしまい、「ウン、なんて言っちゃいけないんですけどね」と困惑する。

有賀さとは、ビデオで本番をやっているときに、おもわず「タナベさん!」という名前を叫んでしまう。それを指摘された有賀は、こころの恋人タナベさんのことをしゃべりはじめた。彼女のAVはすべて、別れたタナベさんへのラブレターだと語るのだが、しかしそれがいまの彼女をささ

えているぎりぎりの「物語」であることが伝わってきて、感動をさそつ。

中学生のときから、家でAVをみながらバイプレーターでオナニーしまくっていた藤田リナは、中学校の卒業文集に「大人になったら、AV女優になりたい」と書く。そして十八歳になるやいなや、単身、事務所をたずねてデビュー。テレビに出演して、みずからのAVを父親と一緒に鑑賞し、いまが超しあわせ、と言いはなつ。広島弁の冬木あづさ、本の表紙を飾つた日吉亜衣も美しい。

ただ、AV女優の実像に迫るといふこの企画それ自体が、実は男性読者を想定したれっきとした商売であり、みだらな貴婦人を所有していたという男の自分勝手な欲望におもねつた「告白」ゲームでもあるという点だけは、けつして忘れないようにしたいものだ。

そしてもっと大事なのは、AVを見て発情してしまう私やあなたのセクシュアリティって何なのかを、深く掘り下げることである。その作業をすつとばした教条的なAV批判は無意味だと私は言いたい。

『朝日新聞』一九九六年六月二日

おまけ

朝日新聞に書いた書評のなかで、もっとも物議をかましたのが、これである。たしかに、こんなのを書いて、朝日新聞に載るのかとは思つたのだが、何食わぬ顔で編集者に渡してみた。そしたら、例会のときに、編集長に呼び出された。それで、何力所かの表現を指摘されて、暗に書き直しを命じられてしまったのであった。もちろん、「書き直せ」とは一言も言われてない。でも、そりゃ、雰囲気と文脈で分かるでしょうが。いまでも

ひとつだけ覚えているのは、編集長の「たとえばこの、バイプレーターという言葉ですが」という発言。なぜかいまでもしつかり脳裏に刻み込まれている。それで、書き直したかと思うでしょう。実は、ほぼ書き直してない。それだけじゃなくて、最後の一段落は、むしろ挑戦的な方向に修正してしまつたのであった。(当時の)朝日の読者がやりそうだった「AV批判」を無意味だと言っちゃつた。これで、没かなあと覚悟したのでした。ところが、さすが名編集長、このまま載せてくれたのです。これが掲載されてから、いろんな反響があつた。なかでも笑つちやつたのは、朝日の長年の読者が編集部宛に手紙を書いたらしくて、その手紙曰く、最近の書評は骨がなくてつまらない、とくに今朝のはひどい、自分はもう朝日新聞を取るのはやめる、という内容だったとのこと。今朝のつてのは、あきらかに、私のこの書評のこと。なんか、笑いかみ殺してしまつたのであつた。あと、私がAV女優の言うことを真に受けているという批判もあつたが、これは、最後のほうの文章をきちんと読んでくれない。私は、この本の企画それ自体が、男性の欲望におもねつた「告白ゲーム」だと指摘している。いずれにせよ、やりすぎの書評という面は否めないが、でも面白い体験ではあつた。